

第2章 ライティングにおける結束性の位置づけ

2.1 言語能力における結束性の位置づけ

2.1.1 Bachman (1990) の言語能力モデルから

第1章で述べたとおり、結束性 (cohesion) が今後のライティング指導で重要な観点であるとしたが、結束性の高い文章を書く力は、全体的なライティング能力のどの部分に貢献するのであろうか。ここでは、既成の言語能力モデルから結束性のある文章を書く力の位置づけを示すこととする。Bachman (1990) の言語能力モデル (図 2.1) では、結束性に関わる要素は、言語能力 (language competence) の一対をなす組織的能力 (organizational competence) の下位能力として挙げられているテキスト的能力 (textual competence) に位置づけられている。

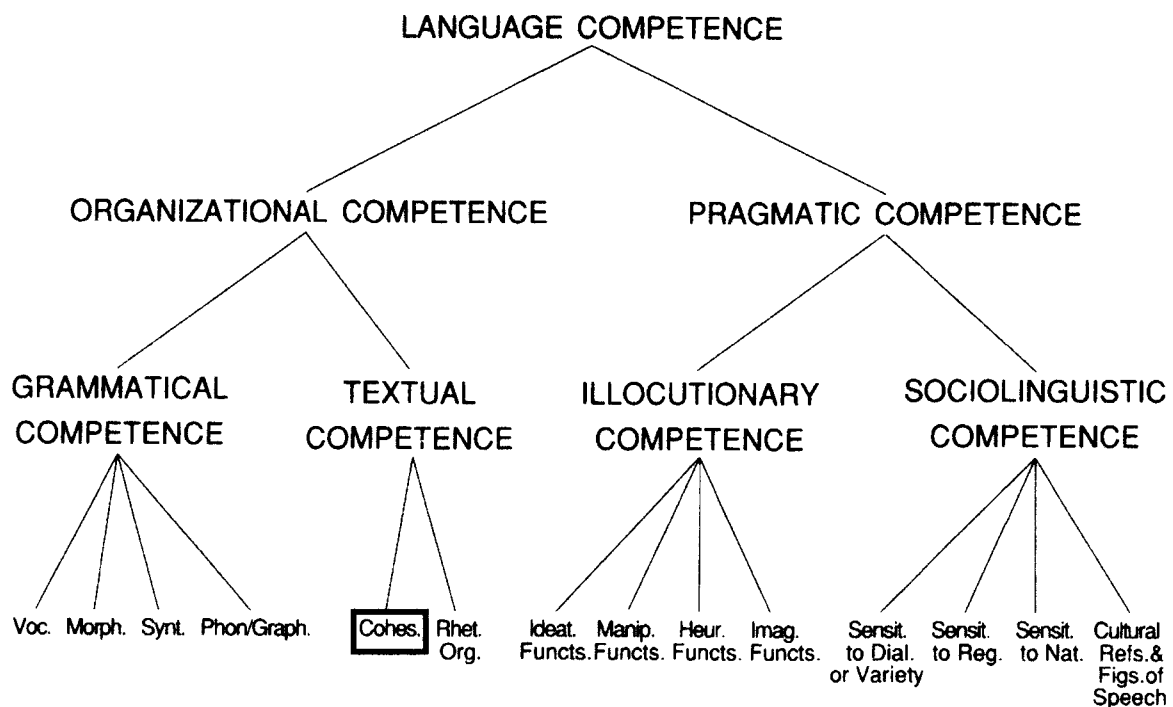


図 2.1 Bachman (1990: 87) の言語能力構成要素

この言語能力モデルが基本となった Bachman and Palmer (1996) や Bachman and Palmer (2010) のモデルにおいても、テキスト的能力は同様に言語能力の一部として据えられている。テキスト的能力とは、Canale (1983) が提唱したコミュニケーション能力の4つの下位能力のうちの1つであるディスコース能力 (discourse competence) に類似するものであり、次の記述の

とおり、結束性と修辭的構成の法則に従って、2つあるいはそれ以上の発話や文の単位を形成することに關わる知識を示している。

Textual competence includes the knowledge of the conventions for joining utterances together to form a text, which is essentially a unit of language – *spoken or written* – consisting of two or more utterances or sentences that are structured according to rules of cohesion and rhetorical organization. (Bachman, 1990: 88)

このモデルから、結束性は、テキストを作り上げるために複数の文をつなげる際の重要な観点であることがわかる。前章で紹介した教育課程実施状況調査において、「複数の文が書かれていて内容のつながりが良い」という評価基準を満たした解答は少なかったことから、まさにこの結束性が今後のライティング指導において重要であることがこのモデルからもわかる。

2.1.2 Celce-Murica et al. (1995) の言語能力モデルから

次は、Celce-Murica et al. (1995) のコミュニケーション能力モデル (図 2.2) における結束性の位置づけを見ることにする。このモデルにおけるディスコース能力 (discourse competence) は、Canale (1983) のディスコース能力と Bachman and Palmer (1996) のテキスト的知識に対応するものであるが、モデルの中心にこの能力が位置づけられているのが特徴的である。次の説明のとおり、ディスコース能力は、話すことや書くことの産出技能に大きく關わる能力であると判断できるが、この能力は、テキストを構成する上で必要なトップダウン的そしてボトムアップ的な言語処理の両方が相交わる地点で作用する重要な能力であることがわかる。

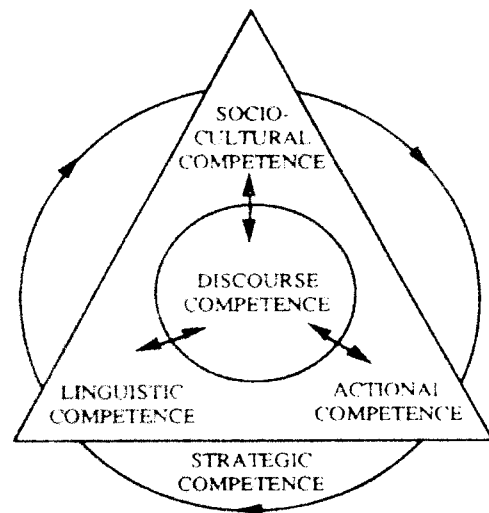


図 2.2 Celce-Murica et al. (1995: 10) のコミュニケーション能力モデル

Discourse competence concerns the selection, sequencing, and arrangement of words, structures, sentences and utterances to achieve a unified spoken or written text. This is where the bottom-up lexico-grammatical microlevel intersects with the top-down signals of the macrolevel of communicative intent and sociocultural context to express attitudes and messages, and to create texts. (Celce-Murica et al., 1995: 13)

このディスコース能力に関わる下位要素として、Celce-Murica et al. (1995) は、結束性 (cohesion)、直示性 (deixis)、統括性 (coherence)、genre/generic structure (ジャンル・総称的構成)、conversational structure (会話構造) の5観点を提示している。結束性の中ではさらに、reference (指示)、substitution/ellipsis (代用・省略)、conjunction (接続) などの具体的な手法を提示しており、このような文法や表現を使用することで、ディスコース能力をライティング上で発揮することが可能であることが示唆されている。このモデルでは、結束性に関わるディスコース能力が言語能力の中心に位置づけられていることから、Bachman (1990) の言語能力モデル以上に、結束性の観点がライティング能力にとって重要であることを示している。

このモデルを基準に、英語能力の中で、結束性を構築する能力がどのような位置を占めるかを図示したものが、図 2.3 である。Celce-Murica et al. (1995) のコミュニケーション能力モデルを全体的な英語能力と同義と捉えた上で、ディスコース能力を始めとする 5 つの下位能力¹をそれぞれ部分的に覆う形で、英語ライティング能力が存在すると考えられる。結束性を構築する力は主にライティング能力と強く関わる力であるが、Cox et al. (1990) によると、結束性はリーディング能力とも強い関係を持つため、ライティング能力の範囲外にも結束性を構築する力が存在することをこの図では仮定している。

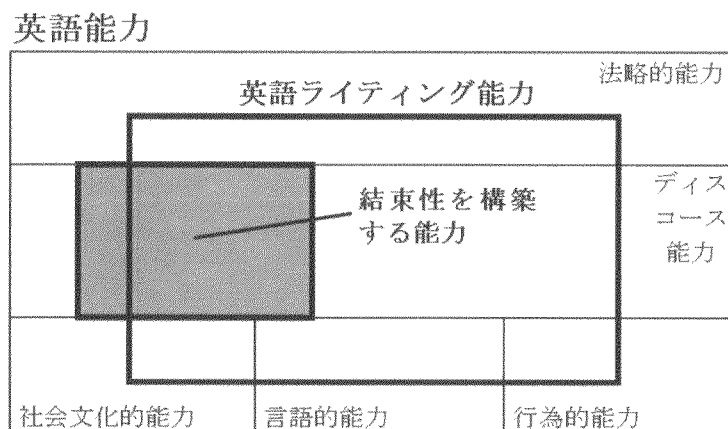


図 2.3 英語能力における結束性の位置づけ

¹ 図 2.3 の Celce-Murica et al. (1995) が提示する 5 つの下位能力の和訳は柳瀬 (2006) によるものである。

2.2 ライティング・プロセスの中での結束性の位置づけ

ライティングにおいて結束性が重要であるとした場合、実際に学習者が英語で作文を書いている中で、結束性はどのような位置づけとして捉えるとよいのだろうか。ここでは、既成のライティングのプロセスモデルから結束性を考えてみる。取り上げるプロセスモデルは、Flower and Hayes (1981) が提唱したライティングの認知プロセスモデル (図 2.4) とする。このプロセスでは「計画 (planning)」、「文章化 (translating)」、「推敲 (reviewing)」の 3 つの段階が示されており、それぞれの段階で、その過程が適切に実行されているかを書き手がモニター (monitor) をするという仕組みになっている。さらに、このプロセスに影響を及ぼすものとして「書き手の長期記憶 (the writer's long term memory)」と「課題環境 (task environment)」が存在する。「書き手の長期記憶」には、書き手のトピックに関する知識や、設定されたあるいは想定される読み手などに関する多くの情報があるが、その情報が必ずしも容易にライティングのプロセスの中に引き出されるわけではない。長期記憶とライティング・プロセスが双方向の矢印で結ばれていることから考えても、プロセスの各段階において、必要な情報を長期記憶から適宜選択していきつつ、書くことをとおして長期記憶に新たな情報が貯蔵されていくことになる。また、「課題環境」には、書き手がその課題に取り組む必然性や切迫性なども含む「修辞的問題 (rhetorical problem)」と、その課題の中でこれまでに書き上げた「産出済みの文章 (text produced so far)」が示されている。

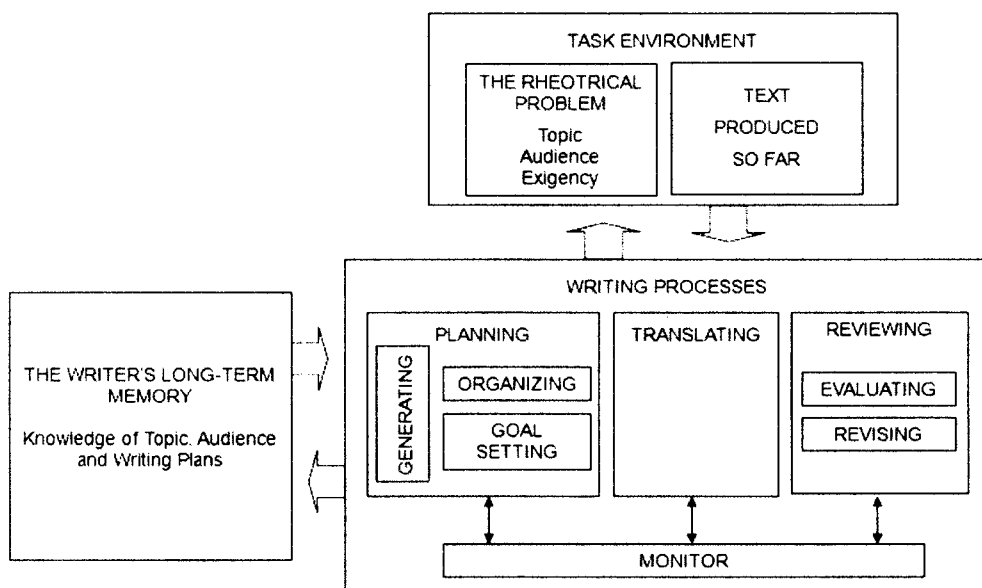


図 2.4 ライティングの認知プロセスモデル (Flower and Hayes, 1981)

では、ライティングという行為を包括的に捉えたこのプロセスモデルにおいて、結束性の高い英文を書くための条件は何であろうか。Flower and Hayes (1981) によると、「計画」の段階で生み出された書くべきアイデアは、頭の中では、単語がばらばらに置かれている状態であったり、または言語化されていない抽象的な概念レベルだったりする。したがって、次の「文章化」の段階においてこれらを言語として書き表すためには、さまざまな種類の処理を同時に実行する必要がある。未熟な書き手にとっては「文章化」にかかる認知的な負担が非常に大きいため、彼らは、アイデアをどのような文法や単語を使って書き表したらよいか、または単語の綴りは正しいかなどのミクロな処理レベルにしか焦点を当てることができない。よって、自らの「長期記憶」から情報を引き出したり、「産出済みの文章」と現時点で書いている文を照合したりするというマクロな処理の実行が困難となる。結果として、結束性に問題があるテキストが産出されることになる。このことが示すように、結束性の高い文章を書くための条件は、計画段階で創出した1つのアイデアを英語として文章化するだけでなく、既知の情報を適切に取り込んだり、それまで書かれた内容と照合したりするという高度なプロセスを辿ることであると言える。

この Flower and Hayes (1981) のプロセスモデルは、特に第二言語または外国語におけるライティングに特化したものではないが、ESL 学習者を調査対象とした Cumming (1989) の研究において、上述した熟達した書き手とそうでない書き手のライティング・プロセスについて、同様の結果が示されている。この研究では、23名のフランス語母語話者が彼らの第二言語である英語で作文を書き、参加者を経験の豊富な熟達した書き手とそうではない書き手に分類し、それぞれのプロトコル分析をとおして、ライティング・プロセスの違いを調査した。その結果、熟達した書き手は、初期段階で立案した計画を基準にしながら、テキストの全体的な内容を常に考慮に入れながら、適切な談話構成を用いてまとまりのある文章を書き進める。一方、未熟な書き手は、計画段階にあまり時間をかけずに、単語選択や文レベルでの正確性や綴りなどのミクロの単位に多くの注意を払うため、テキスト全体のまとまりや文と文とのつながりといったマクロな単位に焦点を当てることができない。また、Flower and Hayes (1981) のモデルにある「推敲 (reviewing)」の作業もあまり行うことはない。このことから、未熟な書き手が処理できるレベルが限られていることがわかる。同様に、L2のライティングの処理過程を研究した Whalen and Menard (1995) でも、L1ライティングに比べて、L2ライティングでは、結束性に関わるテキストレベルの処理よりも、語彙や文構造に関わる表層的な言語レベルの処理を行う割合の方が有意に高いことが示されている。また、日本人英語学習者を対象とした Hirose and Sasaki (1994) の研究においても、熟達した書き手が文レベルに加えて談話レベルの処理も行っているのに対して、

未熟な書き手の処理レベルは限定的であることが判明している。このことを踏まえて、熟達した書き手と未熟な書き手をライティング・プロセス上に図示すると図 2.5 のようにまとめることができる。このように、包括的なライティング・プロセスを用いることで、結束性に関わる文レベル以上の処理過程の位置づけを見いだすことができ、その結果、書き手の習熟度を捉えることができることから、結束性の観点で学習者のライティングを検証することの意義は大きいと思われる。

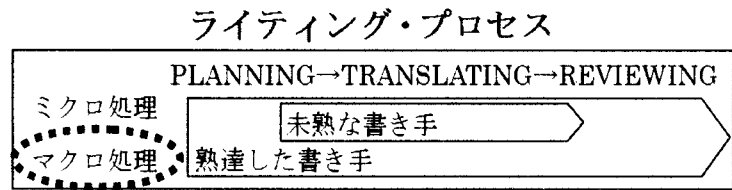


図 2.5 熟達した書き手と未熟な書き手のプロセス

2.3 ライティングにおける結束性とコミュニケーション

上述したとおり、未熟な書き手は文レベルを超えたマクロレベルの処理に困難を抱えている。このレベルの処理に問題が生じた場合、結束性が損なわれる可能性があるが、ここでは、書かれたテキストに具体的にどのような影響が及ぼされるのかを考えることとする。ライティングを行う中で、そのプロセス上で何らかの問題が生じた際は、多くの場合、書かれたテキストに何らかの誤りが生じることになる。宮田 (2002) によると、ライティングのエラーの種類は、意味論的誤り、論理的誤り、語用論的誤り、文法的誤りの 4 つに分類できる。結束性に関わるエラーとしては、語用論的誤りとして、指示詞の誤用によって生じる指示内容が不明であることや、そもそも指示物がないことなどが挙げられる。また、論理的誤りとして、接続詞の誤用などが原因で生じる論理の飛躍や矛盾も結束性に関わるエラーとなる。宮田 (2002) の調査結果によると、日本人の高校生が書いた 150 本の英作文をネイティブ・スピーカーに読んでもらい、どの程度理解できたかを確認してもらったところ、量は少ないながらも論理的な誤りと分類されたものはすべて意味理解に支障があった。また、誤りが起こると意味の理解が困難になる傾向が次に高いものは語用論的誤りであった。約 7 割の語用論的誤りがネイティブ・スピーカーに誤解を引き起こした。接続詞の誤用や文章構成における誤りは意味理解が損なわれることについては、Burt (1975) などの研究でも指摘されていることから、接続詞の誤りは、コミュニケーションに関わる深刻なエラーであると捉えることができる。一方、文法的な誤りで意味理解が困難であったものは約 8% に過ぎなかった。このことから、結束性に関わる可能性のある論理的誤りや語用論的誤りは、ひ

とたびその誤りが起こると、コミュニケーション能力を低下させることに往々にしてつながっていく(図 2.6 参照)ことから、ライティングにおける結束性の重要性を認識することができる。

このように、包括的なライティング・プロセスモデルの観点と並んで、コミュニケーション能力の育成が強く求められる現在においては重要な視点であると言える。したがって、新学習指導要領で文と文とのつながりが強調される中で、ライティングにおける結束性という視点から、日本人英語学習者のライティング能力がどのように発達するかを検証することは意義のあることである。上述した研究における熟達した書き手と未熟な書き手、つまり、結束性の高い英文を書くことができる学習者とそうでない学習者とは、日本人英語学習者のどの段階を示すものであるのか、そして、それぞれの段階で、結束性に関してどのような特徴的な傾向が見られるかを明らかにできれば、『中学校学習指導要領解説 外国語』で指摘された「内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分ではないという課題」を解決することに何らかの貢献がなされることが期待できる。

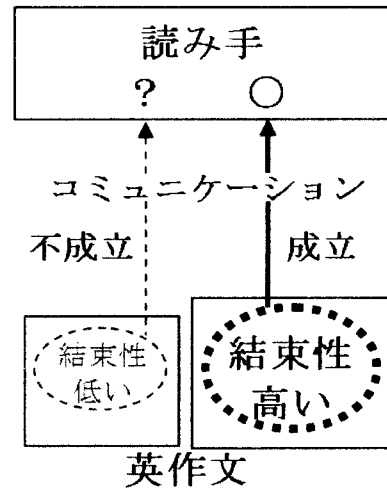


図 2.6 結束性とコミュニケーション

2.4 ライティングにおける結束性の位置づけ

Celce-Murica et al. (1995) の言語能力モデルで見たとおり、結束性を生み出すことができる能力は英語能力を構成する 1 つの大きな要素となっている。また、ライティング・プロセスを説明する上で結束性は重要な役割を果たす。そして、ライティングにおけるコミュニケーションでは、結束性に関わるエラーはその他のエラーに比べて深刻度が高いことから、コミュニケーションと結束性は関係性が強いことがわかった。このように結束性はライティングの様々な要素に関連していることが判明したが、それぞれの関係性をまとめて概観すると図 2.7 のようになる。この図は、本章でこれまで提示した図と、ライティングの評価基準の概略図を組み合わせ、英語のライティングに関わる諸要素と結束性の関係を示したものである。英語ライティングの評価基準(テスト)については、既成の標準化された多くのライティング評価基準やライティング能力の枠組みにおいて結束性の観点が記述されているものが多い(第 4 章で後述)ため、この図に組み

込んだ。

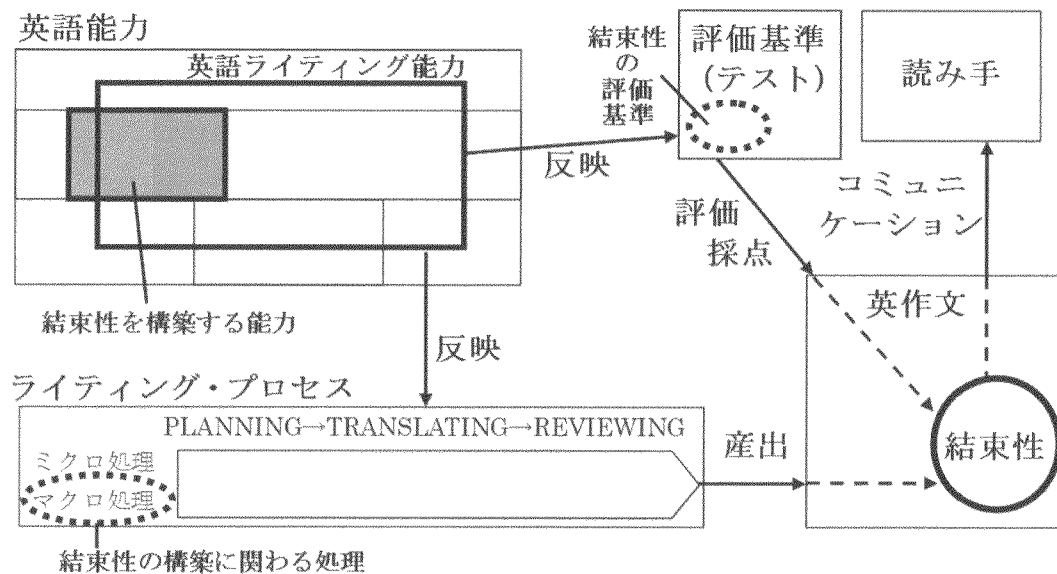


図 2.7 ライティングにおける結束性の位置づけ

図の概略を説明すると、まず学習者には何らかの英語能力とその中にライティング能力が備わっており、それらの能力を駆使することによって、ライティングという行動が始まる。そして、Flower and Hayes (1981) の提唱した Planning → Translating → Reviewing というライティング・プロセスを経て、英作文が産出される。英作文は必要があれば、英語ライティング能力を測定するために開発された任意の評価基準によって、評価ないし採点されることになる。また、コミュニケーションを想定するのであれば、書いた英作文は読み手に読まれることになる。このように、作文がどの程度結束性を持つかということは、ライティング能力、ライティング・プロセス、読み手（コミュニケーション）、ライティング評価基準など、ライティングに関わる各概念から、それぞれ説明が可能であることがわかる。

次に、これらのライティングに関する概念から作文の結束性を具体的に検証するためには、どのような手法が考えられるかを検討してみる。まず考えられるのは、言語能力の理論的枠組みから結束性の位置づけを演繹的に導き出して、実際に学習者がどのように結束性の高いテキストを産出するかを推測することである。図 2.7 では、まず左上の「ライティング能力」から始まり、矢印の流れのとおり、ライティング・プロセスまたは評価基準のいずれかを経由して、英作文の中に見られる結束性に関わる現象に辿り着くということになる。あるいは、逆の手法として、実際に学習者が産出した英作文を結束性の観点で分析することで、その学習者の結束性に関する表

現の使用傾向がわかることになる。その結果、矢印の逆向きの流れを辿ると、ライティング・プロセスや評価基準そしてライティング能力についても何らかの解明がなされることが期待できる。本研究では、後者の方法を採用して、具体的に学習者が書いた英作文の中に結束性に関わるどんな要素が出現するかを実証的に検証することを試みることにする。

2.5 「文章タイプ」の種類と定義

ライティングにおいて文と文とのつながりを表す結束関係を考える場合、パラグラフ単位あるいはテキスト全体の内容のつながりについても考察する必要性が生じることが予測できる。パラグラフやテキストという単位でのつながりを考える際、まず、どのような文章の種類を書いているかが問題となることが想定される。例えば、時系列で書き手が自らの経験を書き進めている場合もあれば、ある問題点について、その原因を究明し、続けて解決策を提案するという内容的な流れで文章を構成している場合もある。つまり、英作文を書く目的やその内容によって、文章のタイプが変わってくる。そこでこの文章のタイプについて、その用語の定義とタイプの種類の提示をここで行うことにする。

英語の文章を分類するための用語として、テキスト・タイプ (text type)、ジャンル (genre)、ディスコース・モード (discourse mode) / ディスコース・タイプ (discourse type)、レトリカル・モード (rhetorical mode) などが使われているが、Fludernik (2000) によると、それぞれが表す内容に複数の意味が存在しており、加えて、これらの用語同士の区別も曖昧であるとしている。例えば、テキスト・タイプという語は、大きな単位としての物語文や意見文など、文章全体を1つに分類する機能もあれば、表面上の文章単位として、会話やレポートなどのように、文章の形式や媒体を意味する場合もある。さらに、話し言葉と書き言葉という極めて上位の概念を区別する際にテキスト・タイプという用語を使う場合もある。また、レトリカル・モードも、物語文や意見文という意味のモードを指す場合もある一方で、Kaplan (1966) が提唱した「英語の直線的な内容の展開」や「東洋系言語の渦巻きの内容の展開」という意味での修辞法の種類を指す場合もある。同様に、ディスコースやジャンルも複数の定義が見られることから、本論文では、これらの用語を使わずに、「文章タイプ」という用語を使用することとする。

次に、具体的にある文章をあるタイプに分類する際に考慮すべき点を挙げる。特に長い文章は、大きな単位として、物語文や意見文などのタイプに分類されるとしても、パラグラフ単位あるい

は文単位では、別のタイプを用いて文章が部分的に展開する場合も多い。Smith (2003) は文章タイプを、物語文 (narrative)、描写文 (description)、報告文 (report)、情報文 (information)、意見文 (argument) の 5 種類に分類しているが、説得文 (persuasive) はこの分類に属していない。その理由は、これら 5 つのすべてのタイプの中で、説得的な要素を持つ文が往々にして現れる可能性が高いからであるとしている。つまり、実際の文章はたいていの場合、単体的な (monolithic) 構造ではないということである。物語文を例にとっても、基本的には時系列のエピソードから成り立っているが、その中で、ある物事を描写したり、書き手が意見を述べたりすることもある。Martin (1992) は、1 つ 1 つの独立した文章タイプを単元的ジャンル (elemental genre) と呼び、実際の文章の単位としては、複数の基本ジャンルが存在することを想定して、マクロ・ジャンル (macrogenre) と呼んでいる。例えば、Hyland (2004) が提示した例では、新聞の社説はマクロ・ジャンルとして捉えることができ、それは、説明文 (exposition)、議論文 (discussion)、反駁文 (rebuttal) といった複数の単元的ジャンルから成り立っている。このことからわかるように、ある文章のタイプを言い表したときに、そこで使われる用語が、Martin (1992) が言うところの単元的ジャンルなのかマクロ・ジャンルなのかを明確にする必要がある。本論文では、文単位などの個別要素から内容の質を検証することよりも、文章全体として、書くべき内容の質に焦点を当てて、タイプの違いによる文法的結束性の特徴を検証することから、特に断りがない場合は、包括的なマクロ・ジャンルとしてタイプを言い表すこととする。例えば、「高校生は制服を着るべきか」というトピックでの作文は、所々に説明的な要素や物語的な要素などが入る可能性があるが、このトピックの文言のみから判断できる最低限必要な文章は、書き手の意見を展開する文章であることから、このトピックの下で書かれた作文は「意見文タイプ」の作文と捉えることとする。

次に、文章タイプの種類を提示することとする。まず、Kinneavy (1971) の分類では、文章の目的ごとに次の 4 種類が提示されている。1 つ目は事実や情報などを伝えるという目的で書かれる説明文 (referential)、2 つ目は読み手を楽しませるという目的を持つ文芸文 (literary)、そして 3 つ目は書き手を説得する目的で書かれる説得文 (persuasive)、そして最後は書き手の感情を言い表す表現文 (expressive) である。具体的な文章内容としては、説明文は、事実描写全般であり、例えば、ニュース記事などが代表的なものである。また、文芸文は歌やドラマや小説など読み手を楽しませるものであり、説得文は広告や政治家の演説や社説など書き手の主張が記されているものである。そして、表現文は、宗教の説教や日記など書き手の感情が表されている文章である。Carrell and Connor (1991) は、特に説明文では比較や対照などの手法を使いながら

解説的な文章を構築していくことから、説明文は ESL 学習者にとって学習すべきもっとも重要な文章タイプであるとしている。この説明文に関して、Hyland (2004) ではより詳細な分類が見られる。この分類では、表 2.1 に見られるとおり、7つの文章タイプ (genre) が提示されているが、それぞれの目的 (social purpose) から判断する限り、そのすべてが Kinneavy (1971) の説明文と合致していると思われる。また、(3) の物語文 (narrative) と (4) の描写文 (description) は、Kinneavy (1971) の文芸文にも合致し、さらに、(7) の説明文 (exposition) は説得文の要素も兼ね備えていることがわかる。

表 2.1 Hyland (2004) の文章タイプ分類と Kinneavy (1971) の分類の照合

Genre	Social Purpose	Kinneavy (1971) の分類
(1) Recount	To reconstruct past experiences by retelling events in original sequence	説明文
(2) Procedure	To show how something is done	説明文
(3) Narrative	To entertain and instruct via reflection on experience	説明文／文芸文
(4) Description	To give an account of imagined or factual events	説明文／文芸文
(5) Report	To present factual information, usually by classifying things and then describing their characteristics	説明文
(6) Explanation	To give reasons for a state of affairs or a judgment	説明文
(7) Exposition	To give arguments for why a thesis has been proposed	説明文／説得文

この Hyland (2004) の分類は、日本で教育目的で広く使われている分類と多くの部分で合致する。日本で多く使われている文章タイプとしては、橋内 (1995) が提示しているように、物語文 (narrative)、描写文 (descriptive)、説明文 (expository)、論説文／意見文 (argumentative)、説得文 (persuasive) などである。この 5 種類を Hyland (2004) の分類と対照させると、書き手の経験を時系列で単純に書き表している作文は、橋内 (1995) では物語文 (narrative) に分類されるが、Hyland (2004) では、物語文といっても、(3) の narrative よりも、(1) の recountの方がその目的により近いと思われる。読み手を楽しませるといった目的が強くなれば、小説的な要素が生まれるため、Kinneavy (1971) が提示するところの文芸文に近づき、Hyland (2004) の (3) の narrative として分類されることになる。また、橋内 (1995) の説得文は Hyland (2004) の分類には見られないが、(7) の exposition の中に組み込む形で捉えるとよいだろう。現に、大

井他 (2008) では、語り文 (narration)、描写文 (description)、説明文 (exposition)、論証文・意見文 (argumentation) の 4 つのタイプを提示しており、説得文はこの分類には含まれていない。Werlich (1976) や Faigley and Meyer (1983) でもそれぞれ 5 種類のタイプが提示されているが、共通しているのは、物語文、描写文、説明文、意見文の 4 つである。したがって、典型的なマクロレベルでの文章タイプとしてはこの 4 つを本論文でも用いることが妥当だと判断する。